

2 0 2 6 年 度

香川大学経済学部編入学試験

問 題 冊 子

小論文

6 ページ

【注意事項】

1. 監督者の「解答始め」という指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 「解答始め」の合図と同時に、すべての解答用紙に受験番号を書くこと。
3. 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、黙って手を挙げて、監督者の指示を受けること。
4. 質問があるときやその他の用事があるときは、黙って手を挙げて、監督者の指示を受けること。
5. 解答用紙は、設問番号ごとに解答すること。
6. 解答は、解答用紙に横書きで記入すること。
7. 解答を訂正する場合は、きれいに消してから記入すること。
8. 解答用紙及び下書用紙は、片面のみを使用すること。

次の文章を読み、末尾の設問に答えなさい。

日本の歴史のなかで「米騒動」というと 1918 年の事件になります。①米騒動は、民衆運動そのものが政党の力をかりず直接に政府を倒す大きな力を発揮した象徴的な事件でした。つまり、この事件のおかげで、陸軍が久しく待望していた寺内という陸軍閥から起用したエースの首相が倒れ、その後任に、初めて爵位を持たない平民の首相が誕生したからです。その内閣は、陸・海軍、外務大臣の三大臣を除いては、すべてが政友会の党员によって組織される本格的な政党内閣と呼ぶにふさわしい内閣でした。その政変劇のきっかけになるのが米騒動です。米騒動は政治的な事件でもあります、お米にからんだ経済的な事件でもありましたし、そしてマスメディアである新聞がからんだ、社会のあり方の変化を象徴するという意味でも重要な事件だったと考えています。

事件そのものの経過は、そんなにややこしくありません。1918 年には、第一次大戦がまだ続いています。前の年に起こったロシア革命に対する干涉戦争（米・英・仏・日）が、孤立したチェコスロバキアの反革命派軍隊の救出を名目にして、ロシアに共同出兵する段階になっていました。つまり第一次大戦の最後の年に至って、戦争は対ドイツとのいわば世界戦争と、ロシア・ソビエト政権に対する干涉戦争という二つの性格をもつようになります。そして、ロシアへの干涉戦争に対して、日本はとくにシベリアに強い権益を主張して、アメリカとの共同出兵を計画します。しかも、その具体的な計画の推進では、陸軍が横車をおして外交的な交渉での合意と比べると 6 倍という大兵力を送り込みます。それはとにかく、シベリア出兵が計画され、8 月には軍事行動が開始されます。その軍事行動が開始された前後の国内で、初めはこんな大事件になるとはだれも予想しなかったような動きがありました。

8 月 2 日のシベリア出兵宣言の翌 3 日に、富山県の小さな町、西水橋町で 200 人たらずの主婦たちが、米の安売りや他県への転売の中止を訴えて、町内の有力者や米屋に押しかけるという事件が起こりました。これから 10 日ほど前の 7 月 23 日には、こちらの方が歴史上では有名ですが、同じ県内の魚津町で数十名の主婦が米屋に押しかける事件が起こっています。前日の夕方に、漁民の女房たちが 3～4 人で井戸端会議をしていました。おそらく夕飯の支度かなにかで水を使っていたんだと思いますが、そのなかで米が高くなって生活が苦しいのは、米をよその県に積み出してしまうからだという話になった。つまり、米が足りないのは他の府県に積み出してしまうからで、港からの積み出しをやめてもらおうと話し合い、仲間をつのって翌朝港に押しかけて業者にかけ合うことにしたというのです。これが後に全国で 70 万人を動員するという米騒動の発端です。この時の事情は、かなり単純なものです。シベリアに出兵するなら兵糧もいるだろうというので、米商人たちが米を買い集めていました。少なくとも「買い占めているらしい」という噂をみんなが信じるような状況でした。シベリア出兵のために誰もが米の値段が上がりそうだと考えている。そして現実にも米の値段が上がってきました。そのために民衆たちが困っていたというのが、日本のどこでもみられる状態でした。

だから、なぜ富山で、なぜ魚津で、ということになりますと、本当はよくわからないのです。ただ最初に全国的に知られるようになったのが富山県の事件であったということです。同じ頃に同じような動きがあっても、わずか 30 人とか 40 人の主婦たちが抗議行動を起こしただけですから、たまたま現地の新聞記者たちが気にしないで記事にしなければ、記録に残っていないかもしれませんから、本当のところはよくわかりません。もっと散発的に各地に動きがあったのかもしれない。少なくとも困っていたという状況は富山県だけではないと思います。魚津の町が特別ではなかったようです。ただ、あえて説明すると、この年の漁が不漁だったことと関係があるかもしれません。この地域は、近海の漁業と同時に、遠洋への出稼ぎ、とくに北海道への出稼ぎが生活のために重要な役割を果たしていました。そちらもうまくいっていなかったようです。したがって出稼ぎ先からなかなか仕送りがない。現地での近海漁業もあまりうまくいかない。一方で物の値段はどんどん上がる。そのために「困った」というのが台所を預かる主婦たちの実感だったのです。そこで「なんとかして下さい、お米屋さん、安く売って下さい」と頼みに行っただけです。そんなにむずかしいこと考えていない、素朴な思いつきでした。

ところが、この事件は単発の事件で終わりませんでした。最初の魚津の事件はいったん警察に説得されて、みんなすごすごと家に帰ります。8 月 4 日に前日の西水橋町に続いて東水橋町で起こった事件の場合には『高岡新報』の記事によると、抗議に行った女房たち 600～700 名が隊列を組んで、米商人や町の有力者に善処を求める事件になりました。もっとも、この動きも素朴な要求にもとづいた、自然発生的な行動だったようです。彼女たちは、「このさい、利益を捨てて米を安く売ってくれ」と要求しました。義理人情の世界での話に近いのですが、有力者たちと普通の農民や漁民たちの関係からいえば「困った時にはおたがいさまだから、なんとかしてくれ」という相互扶助的な発想にもとづいた要求をして、義侠的な廉売*1 を求めたのです。ただし、そこまでだったらかわいいのですが、そのあとが怖い。「なおもしこれを聴き容れざれば、家を焼き払え、一家を殴殺せんと脅迫した」と新聞には出ています。そのくらいの気概がありました。この事件の報道が富山の「女一揆」とか「女房一揆」として、全国紙に 8 月上旬に載りはじめる。こうして情報が全国に伝播すると、あちこちで私たちも俺たちもと米屋や有力者たちに米をなんとか安く売ってくれと運動するようになります。最後はどうもあそこは売り惜しみをしているらしいと焼き打ちし、酔っぱらって一緒に騒いだというのも加わったり、日ごろからけしからんと思っている商人たちをやっつけたりというのも合流して騒動が広がっていきます。そういう事件が、全国で 1 ヶ月半ぐらいの間につぎつぎと起こりました。

この事件の特徴は、きっかけは、ほんとうにささやかな庶民の希望の表明だったことです。ところが、それが新聞の報道を介して「燎原の火」*2 のように広がって、日本中をまきこむような大騒動になってしまったことです。ここで注目したいのは、騒動それ自体は自然発生的で、庶民の自然な発想にもとづいていることです。別の言い方をすると、なんらかの組織された運動ではありません。ただなんとなく「こうしたらなんとかなるのでは」と思って

いた人たちがちょっと動いたのです。ところが、そうした動きが新聞を通して報道されると、一挙に全国的な事件になってしまう。そこには、この時代にはマスメディアが人びとの行動や考え方に強い影響力をもつようになっていたことが示されています。ここに時代や社会の変化がみえています。

ただ、新聞が書き立て扇動したというのは正しくありません。事件が起こった当初、小さな町で村で起きた「女一揆」「女房一揆」の報道は、そんなに多くありませんでした。新聞が注目していたのはシベリア出兵で、毎日のように紙面はシベリア出兵に関するセンセーショナルな記事で埋めつくされていました。だから新聞も、意図して何かやろうとしたわけではありません。「女房一揆」「女一揆」ということばに、やや興味本位に飛びついたかもしれません。その意味では、最初にこの「女一揆」という見出しを考えた人が、意図していなかったにせよ、これだけの騒動を引き起こした仕掛け人というべきかもしれません。しかし、扱いとしては小さかったのです。ところが大事件になってしまう。新聞を書いていた人の側にも「危ない！」ということに気がついていた人は何人かいたようです。そういう慧眼の人による『都新聞』（8月6日）の論説記事が残っています。

動乱はかまどより。台所よりする圧迫は実に恐ろしい。自由に対する圧迫は、忍耐すれば生命だけは別条ないが、台所より来る圧迫は忍耐の余地がない。将に來らんとする動乱は必ず台所より来る。この戦乱中の一部の国は勿論、戦争後は世界各国とも、台所が社会の治安を支配する様になる。20世紀以後に革命ありとせば、それは必ずやかまどより来る。

これがその一部ですが、「これからの動乱というのはかまどから来る、台所への圧迫は実に恐ろしい」というのは、女性が強くなるといっているのではなく、経済問題が重要だということなのです。

この時、政府は何をしたのでしょうか。民衆たちは、いわば多様な思いをこめて、ワーツとあちこち爆竹が爆発するように暴発したのです。政府は、ある意味では事態を理解していなかったし、ある意味ではきちんと理解していました。政府は、原因は米の値段ではない、そんなに重要な経済問題ではないというポーズをとり、責任のがれのためもある原因は新聞の対応にあるという態度をとりました。だから、新聞の発売禁止、記事の差し止めを頻繁にやります。そのため1918年8月15日付の新聞では白紙の紙面ができてしまいます。政府は、それまでも内容によって記事をとめたり発売禁止処置をとっていましたが、この前日に米騒動に関する報道のいっさいの記事にすることを禁ずる処置をとったのです。つまり事件については、報道の全面的禁止の処分を発表しました。いきなりそう言われても、代わりの記事はありませんし、そういう措置自体に対して、新聞記者たちは反発します。だから抗議の意味もこめて紙面の白い新聞を出して、新聞が正常に発行できない状態を示したということができそうです。14日の夕方になって米騒動の記事の載っている新聞は出してはいけないと政府はいう。そのまま間に合わないからといって新聞を出してしまえば発行停止になってしまう。仕方がないから鉛版から全部記事を削り落として印刷したというこ

とです。それと同時に、政府は、やや「焼け石に水」という感じですが、強制的に米を買い取って安く売るという廉売措置をとります。しかし、そちらの面ではたいしたことはできませんでした。これに対して政府が徹底してやったのは報道機関に対する弾圧と、騒いでいる人間の逮捕を含む弾圧でした。それによって2ヵ月たって事態の収拾にだけは成功します。しかし、その大騒動の責任をとって寺内首相は辞任を余儀なくされます。これが米騒動の事件としての全容です。

後日談になりますが、政府はこの時期、新聞の報道に対して非常に強い警戒感を抱いていました。そして、そのことが一段と強い新聞への弾圧につながっていきました。それは、歴史上では「白虹事件」とよばれるもので、大阪朝日新聞が狙い撃ちされました。どうして、そういうことが起こったのか。新聞に対する弾圧に、敏感に反応したのは他ならぬ記者たちでした。彼らは寺内内閣を打倒する、民主化を要求する運動に立ち上がり、各地で記者の有志懇談会を開いたり、大会を開いて民衆を集めて、反政府運動を展開します。その一つとして8月25日に86社、166人の参加により大阪ホテルで関西記者大会が開かれました。その様子を翌日の大阪朝日新聞が記事にします。「寺内内閣は失政の責任を負い速に処決すべし（やめるべきだ）」と決議した大会について、盛り上がった出席者たちの雰囲気伝えるために、中国の古典に書かれている「白虹日を貫けり」ということばを使いました。その意味は、革命的な新しい時代が来るときには日を射るようにして白虹が天に昇っていくということですが、それを大会の状況を表現することばとして使ったのです。

ところが政府は何か口実をもうけて弾圧してやろうと待ち構えていたので、このことばにくいついてきました。要するに、記事は革命的な変化が起こるといっている。日本にそういうことが起こるかもしれないと新聞が書いたとは「けしからん」というわけです。日本に革命が起こるとは何ごとだ、国家の「安寧秩序」を乱すものだとの理由で、同紙を発売禁止処分としました。いいがかりというのは、つけようと思えばいくらでもつけられるものです。発売禁止だけだったら新聞記者たちも慣れっこで、どうということはないのですが、この記事を書いた記者と編集局長の2人が法廷に引きずり出されます。そこまでの前例はなかったので、大事件になります。解決まで2ヵ月あまり、新聞と政府は厳しく対決することになります。

この間に寺内首相は辞めてしまいますが、政府はかなり厳格に新聞報道を弾圧しました。新聞の側は（大阪朝日新聞）、はっきりいうと腰砕けになります。政府の方は、寺内の後を継いだ原敬内閣がその後の方針協議で、無理に有罪に持ち込んで大阪朝日新聞の刊行を禁止するようなことになると反発が強まることを懸念しています。原という政治家はなかなかの策謀家ですから、先を読んでいるのです。無理にやらない方がいい。強く締めつけておいて相手に謝らせればそれですむという戦略でした。だからすごく強面でガンガンやるのですが、謝罪してくるのを待っているわけです。新聞社では、この方針がどうやって決まったかが問題なのですが、最終的には謝ってしまいます。新聞社首脳部と記者たちの総入れ替えをします。さらに12月のはじめに「我が社の本領宣明」という社告、全面的な謝罪文を

新聞に載せることになります。これは日本における新聞の歴史からいいますと、それまでのオピニオン紙からの転換、つまり、事実を事実としてただ伝えるだけの役割へと変わっていく大きな節目の事件となりました。

米騒動は政府も変えてしまいましたが、ジャーナリズムも変えてしまいます。そういう意味で見逃せない大きな事件です。もし、こういうことがなくて、新聞が独自の意見を出し続けることが可能だったら、昭和前半の動乱の時代に別のジャーナリズムの役割があったかもしれません。たとえば大本営発表をそのまま記事にするだけの新聞の性格は、ここで作られていくことになります。米騒動は、騒動を通して政治的な民主主義を実現する大きな一歩であり、政党内閣時代の幕を開けることになります。そのかぎりでは重要な前進でしたが、民主主義の原点である表現の自由を担い、民主政治の基盤になる言論機関が自らの重要な役割を自分の手で縛ってしまうきっかけとなる事件でもあったのです。そして、それをジャーナリズムに強制したのが他ならぬ最初の政党内閣だったというところに、当時の日本の民主主義の根っこの浅さが表れています。

このように米騒動は、現代社会の転換の節目になります。暴動それ自体は、くり返し言っているように、非組織的です。米騒動は、社会運動としては未成熟でした。組織をもたない自然発生的な運動ですから、人びとの根っこのところにある気持ちを反映していましたが、組織をもたないために、自分たちの要求を最終的に実現する手段を十分にもっていません。だから、不満が爆発すると最後には焼き打ち事件など暴徒化することになります。

政党の方はどうしていたかという、なんの対応もしませんでした。この騒動で寺内が倒れれば、こんどこそは間違いなく自分の番だと政友会の原敬は思っています。寺内が辞めた時、山縣有朋は「西園寺にやらせろ」といったようです。山縣は徹底的に原が嫌いで、自分の言うことを聞かないような、政治力を持っている原を次の首相にさせたくないと考えています。しかし、西園寺は引き受けないので結局は原にやらせる以外にないことになります。そういうシナリオが目に見えていますから、何も言わない。そのために米騒動が起こった時、政党は動かなかったのです。そのことが米騒動をこんなに激しい事件にしてしまうことになります。收拾への主体的な指導力を探し出すことができないことになるからです。それまで政党は民衆の側において政府を批判していればよかった。政権が近くなってきたので、だんだん民衆から離れていきます。いつの時代にもそういう政党はありますが、それがこの暴動のころの政治構造の特徴です。

これに対して政党の代わりに重要な役割を果たしたのは新聞でした。新聞が、それだけ大きな役割を果たしたのは、みんなが新聞を読んでいて、そういう報道に敏感に反応するような人たちが出てきたことを意味しています。「おれたちは関係ねえや」とは思っていない。みんなが自分のこととして、日常のことを考えていくなかで、自分の意見を表現するようになってきたのです。そして、そのために、新聞を中心とするマスメディアの役割が次第に大きくなってきました。これは、現代的な大衆社会が生まれてくる条件の一つが成熟しつつあったと考えることができます。そのことを米騒動は表現していたのです。その意味では政府

は的確に、新聞に対して非常に強い弾圧を加えました。ここを締めておけば、あとが楽になると考えたとすれば、たいへん恐ろしいことです。少なくとも、民衆たちの意見をリードし代表する地位から、新聞が自発的におりてしまったことは確かです。

大衆社会が登場したという視点で米騒動を眺めてみると、原因そのものがお米であり、台所であり、かまどであったことも注意すべきことです。そういう経済問題が政治問題に転化して、内閣を倒す大暴動につながることも、大衆社会的な状況を反映しています。だから政府は物価問題に本格的に取り組まざるをえないことになります。アダムスミスの経済学でいうと「市場で物の値段が変わるのは、市場の需給バランスによる。政府は何もしなくていい。政府がやることは警察と消防だけだ」ということになります。これが、資本主義社会ができあがってくる時代の経済政策の考え方です。しかし、現代ではそうはいかない。物価の上昇はおさえなくてはいけない、社会保障も必要だというように、政府の役割が増え、そのために、税金がますます高くなっていきます。そういう政府の役割が増えてきたことを象徴する出来事が、この米騒動をきっかけとする物価対策です。暴利取締りをやるとか、たとえば綿糸などの一部の商品については、輸出を禁止して国内に供給に向けさせる。また、米価の調節のため、朝鮮で米の増産計画を進め、日本人の食味に合う米を作らせて移出させる措置をとるなど、日本の米不足を解消するための需給対策を積極的にはじめます。こういうところから、政府はいろいろな政策によって生活面の面倒を見ざるをえない時代になっていきます。これを大衆社会的な状況の萌芽ということが出来ます。

*1 商品を安い値段で売ること。

*2 はなはだしい勢いで広がってゆくさまのたとえ。

出典：武田晴人『新版 日本経済の事件簿——開国からバブル崩壊まで』日本経済評論社、2009年、第7章所収。作問にあたって一部改変。

設問1 下線部①に関連して、この事件が政党の力なしに日本中をまきこむような大騒動になったのはなぜか。本文の内容に即して300字以内で説明しなさい。

設問2 下線部②に関連して、この事件をきっかけに何がどのように変化したのかを、その理由にも触れながら、本文の内容に即して400字以内で説明しなさい。

設問3 本文で扱われた米騒動の事例を通じて、歴史を顧みることの重要性や得られた教訓について、あなた自身の考えるところを500字以内で述べなさい。